

# ちんすこうりな詩集「女の子のためのセックス」に転がされよ

南原魚人

ちんすこうりなは「↑」である

ちんすこうりなと最後に会ったのはいつだろうか、もう七年か八年くらい前だと思う、だからこの詩集はほとんど僕の知らないちんすこうりなのだろう。本人を知っているうえで読む詩と知らなくて読む詩はどうしても違いが生まれると思う。だから、僕もどうしても知っている人間として読んでしまうんだけど、知らないちんすこうりながそこにいる。なんだが「ちんすこうりな」が馴染みのある記号のように思えてくる。とりあえず「↑」としよう。

上り続けるんだ  
上り続けるだけなんだ  
だから  
ときどき  
飛び降りてやる  
そしたら  
そこが  
一番上

(「螺旋階段」より)

「↑」は正直であり羨望させる

「↑」は正直である。そのスタイルは昔から変わってないと思うんだけど、詩集「女の子のためのセックス」を読んでいると、なんだか人生を一回クリアしてしまったような、達観しているように見えてしまう。

ダーツで負けたらセックスしまーす

女の子は笑っている  
まぶしいくらいきれいな体

あと100回負けたら

自由になれるよ

(表題詩「女の子のためのセックス」より)

この正直さを正面からぶつけられると何とも言えなくなってしまう。

ようこは正直だから  
聞かれたことには  
ばかみたいに全部答える

そうやって  
強くなりすぎたようこ

(「ようこ」より)

僕は2ちゃんねるに自分の実名を書き込んだ知り合いを二人ほど知っているけど、匿名の人達は初めはその人のあら探しをしていたと思う。だけど、匿名対実名、一対多という卑怯性からか段々黙ってしまう。尊敬するものすら現れたりする。(でも、最終的には偽物がたくさんできて成立しなくなるんだけど。) これは、希少な例かもしれないけど、正直を突きつけられると作者と読者の間に緊張が走る。読者は身構えるだろう。正確にいうと正直とは少し違うのかもしれない、自分の隠したい部分である。身構えたあとそれを一度受け入れてしまうと羨望のような気持ちが生まれてくる。人によるのかな、少なくとも僕には生まれてくる。

### 羨望してしまうと「↑」に転がされる

僕なんかはものを書いていてもよく正直と嘘の間をチョロチョロ動いているだけだと思う。実際、「↑」も正直と嘘の間を歩いているのかもしれない、でもそれは本当にギリギリなところを、たぶんピンヒールなんかを履いて歩いている。

嫌われたくなくて  
このごにおよんでまだ嘘をついている

嘘をつきたくない  
正直でありたい  
誠実な人に誠実でありたい  
嘘をつく人にもつかない人にも  
嘘をつきたくない

(「恋文」より)

東京、  
アスファルトの下に  
土が埋まっているなんて信じられない  
ハイヒールのかかとを  
すり減らしながら  
すり減らされながら  
元通りになることはなくて  
あられもない  
かつかつという音を  
ごまかしながら歩いて行く

(「おっぱぶ2」より)

詩人はシャイだから比喻を使うんじゃないか、なんてたまに思う。そう思うと「↑」にとって、詩って、比喻ってなんだろうと思う。きっと、表現方法の一つなんだろうけど。それだけじゃないと思いたくなる。その気持ちを抱くと「↑」に転がされてしまう。だってそれは彼女にこうでいて欲しいという自分本位の気持であるから。

じゃああなたは変わらないで  
ずっとそのままでいたら  
私は変わるよ  
あなただけずっとそのままで

いて

くれなくていい

(「無題」より)

ああ、転がされてしまう。

特に意味はなかったし、やっぱり「ちんすこうりな」に戻そう

独占欲とかその否定とか、割りきりたい思いとか、でもやっぱり寂しいとか、でも今楽しいとか、気持ちを正直にぶつけられるのが「ちんすこうりな」の表現者としての強さである。そして、それを理解している彼女は優しいのだと思う。

乱暴にされたように

乱暴にしたくないと思っている

優しくいかせてくれたように

優しくいかせたいと思っている

(「見えないちんこ」より)

そして、それを思うと僕は「ちんすこうりな」に転がされるのだと思う。言わずもがな最後に言っておくと「ちんすこうりな」にそのような意図はない。(と思う。)